

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 6 月 9 日現在

機関番号：33804

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2012～2014

課題番号：24792523

研究課題名(和文)NICU退院児の在宅移行看護モデルの考案

研究課題名(英文)Devising a model for infants during the transition from NICU care to home care after discharge

研究代表者

室加 千佳(MUROKA, Chika)

聖隷クリストファー大学・看護学部・助教

研究者番号：40616918

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 900,000円

研究成果の概要(和文)：本研究の目的は、NICU(Neonatal Intensive Care Unit：以下NICUとする)看護師が、退院後に患児の自宅へ訪問する在宅移行看護モデルを考案することである。そのために、(1)NICU入院中に提供される在宅移行のための看護の実態、(2)NICU退院後に患児の自宅へ訪問するNICU看護師(以下NICU訪問看護師とする)が提供する看護の実態、(3)初回の小児科外来時におけるNICU訪問看護師の役割を把握した。以上3点より、NICU在宅移行看護の評価・修正を行った。

研究成果の概要(英文)：The purpose of this study is to devise a nursing model for Neonatal Intensive Care Unit (NICU) nurses that can enable smooth transition of infants from NICU care to home care, whereby NICU nurses can visit the homes of the infants after discharge. For this purpose, we obtained information about (1) the real situation of the nursing care provided at the NICU in preparation to transition to home care, (2) the real situation of nursing care provided by NICU nurses who visit infants discharged from the NICU (hereinafter referred to as "NICU visiting nurses"), and (3) the role of NICU visiting nurses at the first follow-up visit to the pediatric department. We evaluated and modified nursing practices during the transition from NICU care to home care based on 3 points mentioned above.

研究分野：医歯薬学

キーワード：看護学 家族看護学 NICU 在宅 訪問看護

1. 研究開始当初の背景

(1) NICU 入院児の現状

周産期医療の進歩に伴い、高度な医療を必要とし重篤な疾患を有する新生児が救命されるようになってきた。NICU 入院となる低出生体重児は、全出生の 9.6% (厚生労働省,2008) と約 10 人に 1 人の割合で出生し、年々増加の一途を辿っている。上記の背景からも、NICU 必要数は約 3 床/1000 出生 (厚生労働省,2008) とされており、約 10 年前と比較すると約 50%も増加している。その中で、近年社会問題視されているのは、長期にわたり人工呼吸管理を必要とする新生児の増加に伴い、NICU 患児が長期入院化することで、NICU 病床数が不足していることである。それと同時に、NICU の病室環境は医療機器に伴う騒音や 1 フロアーというプライバシーの配慮が乏しいこともあり、児が家族と共に過ごすにはふさわしい場所と言い難く、児の QOL(Quality Of Life : 以下 QOL とする)の視点からも NICU での長期入院は問題である。

(2) NICU 在宅看護の現状

長期入院を回避しようと、人工呼吸管理を必要とするなどのハイリスクケアを伴う児が、退院と同時に在宅へ移行するケースが増加している。在宅移行の理由として、医療の進歩で長期生存が可能になり、重症心身障害者施設の入所者に変動がなく、施設への受け入れは困難な状況であることや QOL の視点が挙げられる。在宅移行後は母親が主たる介護者となっており、介護の負担が大きい。その母親たちは「不安」を抱えた状態で介護する現実がある。

また、在宅移行後に利用するサービスとして訪問看護があるが、訪問看護師は、小児看護経験の少なさから家族とのコミュニケーションに戸惑い、小児の病状判断に不安を感じながら訪問を行っていた。

以上のように、在宅医療に対して、母親や医療者側までも困惑しながら実施している現状がある。

(3) 研究施設の在宅看護の現状

研究調査の実施施設である、A 県西部の B 市にある総合周産期母子医療センター内の NICU では、年間約 400 人の児が退院している。病院独自の取り組みとして院内で退院支援の看護師を認定し、退院後も継続した看護を行い他職種と連携できるように、院内での認定を受けた NICU 病棟の看護師が退院後の家庭訪問を実施している。

この取り組みについて文献検討をした結果、他施設での報告はまだない。そのため、本研究を実施することで、今後の NICU の在宅看護の発展に寄与できると考える。

用語の操作的定義：本研究で NICU とは NICU 病棟と GCU 病棟のことを示す。

2. 研究の目的

本研究は、NICU 看護師が、退院後に患児の自宅へ訪問する在宅移行看護モデルの考案を目的とする。モデルを考案するために、以下の 3 点を実施する。

①NICU 入院中に提供される在宅移行のための看護ケアの実態の把握

②NICU 退院後に患児の自宅へ訪問する NICU 看護師(以下 NICU 訪問看護師とする)が提供する看護の実態の把握

③初回の小児科外来時における NICU 訪問看護師の役割の把握

以上 3 点を実施し、NICU 在宅移行看護の評価・修正を行う。

3. 研究の方法

(1) 研究デザイン

質的研究

(2) 調査場所

A 県西部の B 市にある総合周産期母子医療センター内の NICU 病棟

(3) 調査期間

2012 年 6 月～2013 年 3 月、2014 年 4 月～2015 年 3 月

(4) 調査対象

NICU 訪問看護師が担当としている児の母親とその訪問看護師

(5) データ収集方法

1 回 30 分程度の半構成的面接法を、退院決定時、家庭訪問時、初回小児科外来時に実施

(6) 倫理的配慮

研究参加協力については、自由意思を尊重し、書面と口頭にて研究目的・方法等を説明した。また、データの匿名化や提供される看護の保証を行った。児や母親の状態を考慮し、データ収集を実施した。本研究は、研究者所属施設の倫理委員会(番号 12018) および、研究対象施設の倫理委員会の審査(番号 1209)を受け、承認が得られたのち、研究を開始した。

4. 研究成果

NICU 入院中や退院後に提供される在宅移行のための看護ケアの実態を把握するため、9 組の母児を対象に調査を実施した。その母児を担当した退院支援看護師 9 名と患児の母親 9 名に、実施された看護をインタビューにて確認した。

なお、9 名の患児は在宅呼吸器使用や気管切開、経管栄養をしていた。

(1) NICU 入院中に提供される在宅移行のための看護ケアの実態

入院中 NICU 看護師は、【在宅支援必要児の抽出】を行い、【情報共有】する。その後、患児の家族に対し、【在宅移行意思の確認】し、【医療看護技術の指導】を実施。退院近日に【医療看護技術の確認】を行い、退院後

スムーズに在宅看護ができるよう【家族調整】や【他職種連携】を実施し、【在宅生活のイメージ化】を図っていた。

具体的には、【在宅支援必要児の抽出】としては、院内共通の「外来・小児在宅アセスメント」ツールを用い、在宅支援が必要となる患児をピックアップし、該当患児にはプライマリナースと共に院内認定の退院支援看護師が支援していた。

【情報共有】としては、NICU 病棟の医師・看護師の他、在宅連携担当の専任看護師、医療ソーシャルワーカーが入り、患児の状態を把握するとともに、在宅支援の見通しを立てる。

【在宅移行意思の確認】は、介護の中心となる両親等に今後の方針を医師から説明し、在宅移行する意思があるか確認する。

【医療看護技術の指導】としては、在宅では、介護者が医療的ケアの手技を実施することとなる。そのため、看護師は入院中から手技を伝える必要がある。手技の指導だけでなく、在宅で使用する医療機器（在宅酸素等）の操作方法を伝授する。

【医療看護技術の確認】は、指導を基に、両親や祖母等介護者となる人が医療看護技術を実践し、医療的手技や医療機器の操作方法が正しく実施できるかを退院前に確認し、在宅で実践できると判断した後退院となる。

【家族調整】は、在宅で患児を介護する中で、母親1人が介護者にならないように、退院後の家族の役割を確認するとともに、医療的ケアの手技を介護者になりうる人全員に覚えてもらう必要があるため、入院中から家族の調整を実施する。

【他職種連携】(図1)とは、在宅支援に関与する関係者を病棟に招き、両親も含め合同でカンファレンスを実施していた。病院側スタッフとしては、NICU 病棟主治医・プライマリナース、退院支援担当看護師、在宅連携担当の専任看護師、小児科外来看護師、小児科病棟看護師、救急外来看護師、医療ソーシャルワーカーが出席していた。在宅側スタッフとしては、訪問看護師、保健師、時には行政担当者も参加していた。また、退院後に家族が困惑しないよう、情報提供を用紙や電話で実施していた。スムーズに連携が図れるよう、入院時から他職種と情報交換を行っていた。

【在宅生活のイメージ化】では、自宅の間取りを確認し、医療機器の設置場所を両親と一緒に調整していた。また、外出時に医療機器を乗せるバギーが必要になるため、バギーの製作を考慮しているケースもあった。外出時の移動方法をイメージするなど、スムーズに在宅生活を送ることができるように調整・確認を行っていた。

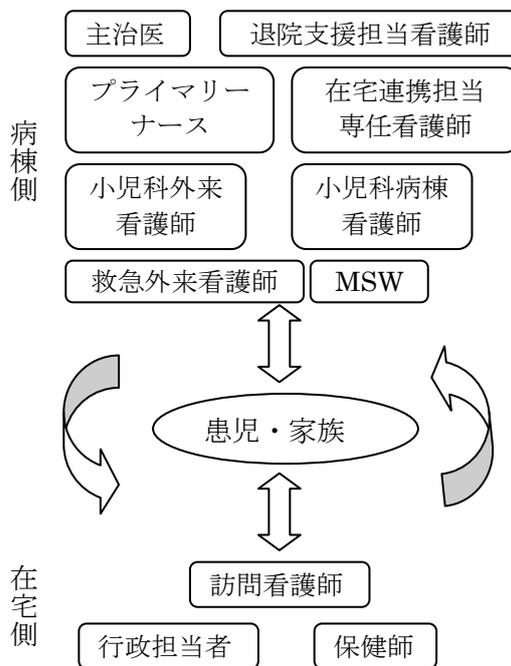


図1 患児・家族を取り巻く他職種連携

(2) 訪問看護時に NICU 訪問看護師が提供する看護の実態

NICU 訪問看護師が家庭訪問時には、【患児の状況確認】【介護状況確認】【医療看護技術の確認】とともに、【他職種への指導】【他職種連携】が行われていた。

【患児の状況確認】については、入院中と同様な生活であるか、病状だけではなく、睡眠、機嫌、発達についても確認していた。

【介護状況確認】は、家族の介護役割や、疲労度の確認、必要に応じて精神的フォローも実施していた。

【医療看護技術の確認】については、在宅で医療看護技術がスムーズに実施できているか、在宅医療機器が正しく使用できているかを観察していた。在宅で使用している医療物品が次の小児科外来までに量的に不足はないかについても確認していた。

【他職種への指導】では、NICU 訪問看護師が家庭訪問の実施に合わせ、保健師や訪問看護師が必要時同席していた。そこで、NICU 訪問看護師に訪問看護師が、入院中に実施していた看護技術等の確認をしており、必要時指導を行っていた。

【他職種連携】については、他職種への指導で記載した通り、患児に対して必要な看護ケアを他職種間で共有していた。また、NICU 訪問看護師が家庭訪問を実施後、訪問看護師や保健師、小児科外来看護師へ家庭訪問時の様子を書類に記載し、情報提供を行っていた。初回の小児科外来後、NICU 訪問看護師は患児や家族へ看護提供は不可能になるため、看護ケアが途切れないように、訪問看護師や保健師へスムーズに繋げていた。

(3) 初回の小児科外来時における NICU 訪問看護師の役割

初回小児科外来時には、【患児の状況確認】【介護状況確認】【医療看護技術の確認】と【他職種連携】が行われていた。

また、【今後の方針確認】とともに、【小児科へ看護移譲】が実施されていた。

【患児の状況確認】【介護状況確認】【医療看護技術の確認】と【他職種連携】については、(2)と同様の看護が実施されていた。

【今後の方針確認】は、次回小児科外来受診時までの在宅での注意点を伝えていた。また、患児の病態に関する見通しの他、患児の成長を考慮した養育方法についても確認があった。

【小児科へ看護移譲】については、初回小児科外来を最後に、NICU 看護師が患児やその家族へ看護を実施することはないため、小児科外来看護師への情報提供や、両親（母親）へ小児科外来看護師を繋ぐ役割を担っていた。

(4) NICU 訪問看護師への満足度

患児の母親たちに NICU 訪問看護師より受けた看護を確認したところ、【医療技術面のフォロー】、【他職種連携】【精神面のフォロー】が挙げられた。

【医療技術面のフォロー】としては、介護者（母親）が在宅で困った際、病棟への電話や NICU 訪問看護師の家庭訪問を通じて、吸引の方法や、経管栄養注入等、医療技術の確認を行っていた。実際、医療技術を指導した看護師からフォローを受けることは安心感に繋がっていた。

【他職種連携】としては、入院時から在宅時に関与する医療スタッフとの顔つなぎが行われ、NICU 訪問看護師から保健師への情報提供が実施されたことより、NICU 退院後も安心して在宅時に関与する医療スタッフへ相談することが可能であった。

患児の母親が、NICU 退院後の看護ケアに一番満足していたことは、【精神面のフォロー】であった。入院中から信頼関係が成り立った看護師が患児を診る安心感が重要な要因となっていた。患児や家族の入院中の状況を理解している看護師が、退院後介護者（母親）の不安が増す時期に精神的フォローを実施する必要性が見出された。

以上より、【医療技術面のフォロー】、【他職種連携】【精神面のフォロー】は、在宅で患児を介護する母親にとって、安心感をもたらしていた。

(5) NICU 退院児の在宅移行看護の実態

以上(1)～(4)の結果より、NICU 退院児の在宅移行看護モデルを作成した(図 2)。

図 2 は、患児や家族対象の看護ケアについては青色枠内に、他職種対象の看護ケアについては黄緑色枠内として示した。



図 2 NICU 退院児の在宅移行看護モデル

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔学会発表〕(計 1 件)

室加千佳、NICU 訪問看護師による在宅移行看護ケア—NICU 入院中において—、第 17 回日本母性看護学会学術集会、2015 年 6 月 28 日、JA 共済ビル カンファレンスホール (東京都)

6. 研究組織

(1) 研究代表者

室加 千佳 (MUROKA CHIKA)

聖隷クリストファー大学・看護学部・助教
研究者番号：40616918